矢作川くだり実行委員会

調査団体名	： 矢作川くだり実行委員会	団体代表者名	： 深津 修　実行委員長
設立年	： 2001年	対応してくれた人の名前	： 深津 修、大屋 守、野村 佳奈子
団体URL	： http://yahagi.link/		
活動拠点	： 安城市桜井公民館	調査員	： 太田 修、清水 雅子
取材日	： 平成30年12月14日	レポート作成者	： 清水 雅子

活動内容

毎年夏に矢作川においてイカダくだりのイベント（矢作川くだり）を開催。このイベントは競争ではなく全員の完走を目指すもの。ただイカダで下るだけではなく、中州で宝探しなどのゲームを行ったり、イカダの装飾や乗員の衣装で光るものがある艇やチームワークがすばらしい艇には特別賞を設定している。

矢作川くだりは、前実行委員長である当時市議の都築光哉氏が呼びかけ、桜井地区をもりあげよう！と始まったもの。以前、豊田市内で行われていた筏下り※を見習って始めた。

※「矢作川筏下り大会」は1987～2006年まで計20回、豊田市内で行われた。

キャッチフレーズ

母なる川、矢作川

会のモットー（何を大切にしているか）

安城市民にとって母なる川：矢作川に触れ親しむことで、自然のすばらしさと大切さを学び、矢作川への親しみや愛着を深めることを目的としており、水源地への感謝を次世代へ伝えていきたいとの思いで実施している。

そのため、川下りの前にゴミ拾いを実施したり、イカダの材料も川を汚さないものにするよう呼びかけている。

また、「安全第一」をかかげ、出艘前のイカダ構造チェックや乗船時の禁止事項の取り決めをしっかり行い、安全対策に十分配慮している。

その上で、参加者が喜んでくれることを考え実施している。

実行委員会では、各部会の信頼関係によるチームワークを大切にしている。

設立から現在に至るまで変化したこと（その1）

・川くだりの参加者は、初期の頃は60艇を超えることもあったが、安全対策を考えて今は40艇までとしている。
・はじめは約2kmの距離を川下りするだけだったが、現在は下る距離も約4．5kmに伸び、参加者に楽しんでもらいたいとの思いから、河岸で音楽演奏やフラダンスをしたり、中州で宝探しゲームを実施するなど、毎回、少しずつ工夫してイベントを変化させている。

開会式の様子

いざ、出艇！

設立から現在に至るまで変化したこと（その2）

・はじめはなかったが、チームワーク賞やデコレーション賞などをつくり、参加者には多面的に楽しんでもらっている。
・近年、気象条件が変化してきており、この4年間で2度、台風や増水のためイベントを中止せざるを得ない状況となっている。中止になると、参加者や協賛企業のモチベーションが低下してしまう。
・ゴール地点（藤井公園東の堰）に砂が溜まって浅くなってきている。

連携している団体・専門家・自治体など

安城市、市教育委員会、市観光協会、(株)キャッチネットワーク、安城産業文化公園デンパーク、安城ホームニュースが後援している。
また、平成30年は地元のスポーツ関連団体や企業など9団体が協力、45社の企業や商店の協賛があった。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、地域資源の活用など）

矢作川という地域資源を活用した筏下りをとおして、自然を知り親しむことはもちろんのこと、自然の怖さもしっかりと伝えることで、青少年の健全育成を目的としている。
また、安全対策で多くのボランティアスタッフが必要だが、桜井地区の地域住民をはじめ、アイシンAW学園の生徒、地区消防団の方々、桜井ソフトボール協会などがスタッフとして参加しており、地域の団結につながっている。
イカダくだりチームは地元の人たちが多く、それぞれ家族や職場、友人などで参加しており、イカダ作成から出艘までの一連の作業をとおし各コミュニティの団結力が増す一助となっている。
また、参加チームは地元だけでなく矢作川流域の周辺市町や流域外から来る方もいらっしゃる。流域内交流、そして流域間交流にもつながっている。

現在直面している課題

実行委員が高齢化してきたこと。世代交代を進めたい。

今後やってみたいこと

・もっと参加者が楽しんでもらえる、喜んでもらえる仕掛けをしていきたい。以前に、キャッチ（ケーブルテレビ局）のパーソナリティが来てくださり、ショッカー軍団がいかだ下りをしてくれたことがあった。毎年、何か目玉をつくっていきたい。
・水源町の明治用水頭首工をスタートとした長い距離のいかだ下りをしてみたい。
・バーベキューや音楽祭も開催してみたい。

今後、どんな情報・人脈などが必要か

・参加者のライフジャケットの準備は必須だが、少ない予算の中でライフジャケットのレンタル代が大きな負担となっているため、国等でライフジャケット貸し出しの制度をつくってもらえるとありがたい。
・協賛企業はたくさんあるが、参加企業はあまりないので、CSRや社員教育の一環として多くの企業さんに参加していただけるといい。

筏運搬の重労働に消防団の奮闘

アイシンAW学園生も力仕事のお手伝い

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞
なぜ地域活性化で「いかだ下り」を選んだのか？
＜答え＞
もともと、この地域の方々が青少年健全育成の活動としてお化け屋敷をやったりしていたが、豊田市で行われていた川くだりを見学し、目の前にある矢作川という自然豊かな公共空間を改めて認識し直し、昔、自分たちが川で遊んでいたように今の子供たちにも自然に親しんだり触れて欲しいと思い、矢作川の川くだりをすることとなった。

その他、伝えたいこと

・どの写真をみても、参加者は笑顔ばかり。この“笑顔”が実行委員のやりがいになっている。実行委員も40名いるが、多少の入れ替わりがあってもほとんど辞める方がいない。準備は大変だが、楽しんでいる。
・参加者もリピーターが多く、毎年、楽しみにしてくださっている。
・スタッフとして、地域の方、岡崎のカヌー協会など、多くのボランティアが参加してくださっている。アイシンAW学園や消防団の若いメンバーは、筏を川に下ろしたり川から引き上げたりするのに活躍している。
・イベントに向けて、広大な河川敷の草刈りに膨大な労力が必要だが、市や国交省（矢作川の管理者）に加え、ボランティア、地域の農家の方も手伝ってくれるので、ありがたい。

取材者の感想

今回の取材で、桜井地区の方々の結束力の強さがひしひしと伝わってきました。桜井地区では他にもさまざまなイベントを実施しているとのことだが、この矢作川くだりでも、前述したボランティアさん達をはじめ、実行委員として参加するデザインのプロがポスターを作成したり、消防団OBもカヌーで安全監視を行ったり、と、地域の総力を結集していることがよくわかる。
「こどもたちのために」という、人間として一番大切な根本目的を基盤に地域で団結する。参加者のことを考えて創意工夫を重ねる。だから、大変だけど、参加者もスタッフも楽しい。
こんなにステキな地域活動が安城市という都市にあるとは！　矢作川流域の実力をみせつけられた思いである。

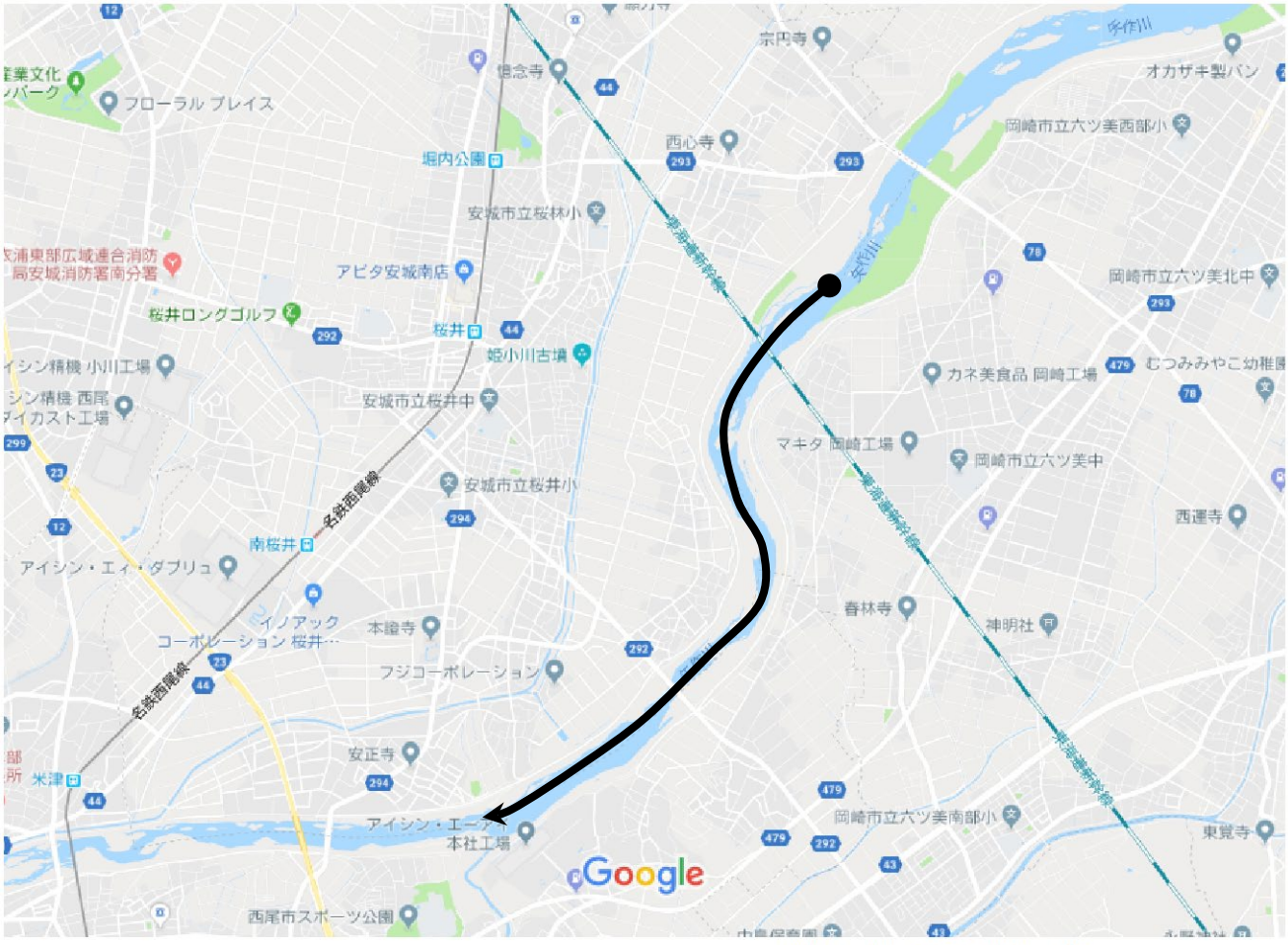
実行委員の面々

矢作川を下る筏

気持ちよさそう！楽しそう！

表彰式の様子

右：今回の取材の様子
左から、野村さん、深津さん、太田、大屋さん



【矢作川くだりのルート（取材者作成）】
安城市川島町上堤東（川島河川敷公園）から安城市藤井町阿原の藤井公園東の堰までの 約4.5km